

書の伝統と革新

風岡五城会長



今年六十回展を終えた東書芸の理念をみると、東書芸は伝統派か革新派の団体か。進取の精神に富んだ革新の感じがするが、伝統・革新を考えてみる時に、どういう風に書がそう言われるようになってきたかは、中国の書の歴史を振り返ってみると分かってくる。例えば長いその歴史の中で、伝統の書の元祖はやはり王羲之・王献之の二王であろう。そして革新の書といわれるところを挙げてみると、唐代の張旭・懷素・顔真卿が位置づけられる。

張旭は草書が巧みで、酒好き。酒好きが話題になるのは、当時書は酔って書くものでないと意識されていて、異端とされたと思われるが、一つ残っている楷書の拓

本を見ると、むしろ王羲之の伝統を踏まえたように几帳面に書かれている。次の懷素は僧侶だが一日中酔っていたといわれ自叙帖が有名。これは狂草と呼ばれ情熱を叩きつけて書く草書である。しかし、二人共酒の力を借りて自制心を解放しこれまでと比較すると風変わり、書を書くイメージを変えそれを革新的なものを書いたとされたが、実は根底では筆が擦り切れるほど多く先人の書を習っているのである。さらに、玄宗皇帝の忠臣として有名な顔真卿も家系的に文字学に造詣が深い。晩年のその楷書は顔法と呼ばれ、篆・隸の書法をそこに取り入れて特徴的だが、若い頃(四十代)は古典を相当学んでいる。

意志のようなものはあまり感じない。しかし、宋代の革新は少し様子が違ってくる。代表的な三人のうちの蘇軾は、書の価値は人間の価値であるとし、人は夫々顔や考え方が違うように書もそうあるべしとした。彼も多くの先人の書を学びながら技術に習熟し自身の書造っていったのだが、書は技のみでなく人間そのものの表現という、意識の改革によって書が変わっていくとし、これはある意味本当の革新と言える。また黄庭堅は蘇軾と仲が良く、年下で互いに人間を認め合うフランクな関係であったが、性格は随分と違った。蘇軾は大らかで黄庭堅は真面目な努力家タイプ。功よりも拙が大事(功は要るが前提)とし、表面的な技巧でなく、また脱俗の精神・禅学を重んじた。ここにも根底には古人の書があるが、そうした書に対する思想的な見方・価値観が変わってきて従来の書と趣を異にした。米芾は少し変わり者でその逸話も多いが、書はどちらかと言えば一番王羲之に似ている。彼の書は集古字と言われたが、何故革新の中に入るかというと、古書を懸

命に習った時に、古人の書は「天性自然」自然の変化のように書も自在である」と気づいた。変化も自然ならば二王の形を真似なくとも良いと考えが行き着いて自身の書造った。古法を根底に自然の精神の変化に従って書を書いたところが革新の所以である。

このようにみえてみると、どの時代も底流にあるのは古い書法。始めは皆伝統派だが、つきつめていく上に新しい考え方や方法を導入して、これまでと違うものを生んだ。革新といっても皆、伝統に根ざしていることが大事である。我々も、綺麗な字を書きたいだけから、心が多様性を求める、それぞれ個人の革新の時期に至った時に、一生懸命それに取り組めば良い。そうすると自分の中に新しいことが湧いてくるものだ。出そうと思っ出すものでなく、自然に出る。自然に出なくては本当ではない。古いものだけ守り頼ってばかりいては駄目で、真似るだけで終わってしまったら止まる。個人のレベルは違うが、何か良いと思っった事を徹底的にやり通すということが大切なのである。